

農業用肥料向け (株)日本海水

塩化カリウムを製造

その多くを輸入品に頼っている農業用肥料向け塩化カリウム。(株)日本海水では、製塩後に残るにがりからの製造に取り組み、実用化を目指している。同社の八本功・事業開発室長に開発の経緯や展望を聞いた。

にがりを冷却し生産

業界全体の塩需要が伸び悩む中、新たな事業展開を模索していた同社では、2008年4月より農業用肥料向けの塩化カリウムに着目。その背景には、①にがりに多く含まれる塩化カリウムの採取が容易である点②塩化カリウムの世界的な価格高騰③親会社のエア・ウォーター(株)の農業分野への進出計画、などがあつた。

「現在輸入されている塩化カリウムのほとんどは岩塩と同様に鉱石を粉

砕するカナダ産がほとんどで、純度は95%と高い。我が社ではイオン交換膜法による製塩後に残るにがりを冷却し、

海水の新たな利用法模索

世界的な価格の変動

外国産の塩化カリウムの価格は従来安定していたが、08年の世界的原油価格の高騰により、植物を原料とするバイオエタノールが原油の代用品として注目を浴び、穀物とともに肥料も値上がりした。



八本 功氏

やもと・いさお氏=1983年に旭化成(株)入社後、新日本化学工業(株)小名浜研究室に配属。1995年、新日本ソルト(株)小名浜工場で塩の商品開発、品質保証を担当。

関連会社の旭ソルト(株)社長兼工場長、(株)日本海水環境事業部部長などを経て、2008年7月より現職。50歳。

も在庫を持てう。余すようになつた結果、肥

の輸入量に匹敵するほどの生産量にはほど遠いのですが、合成品ではなく天然の海水が原料であること、製塩とともに安定的に生産されることから、肥料メーカー様には興味を持っていただいているようです。あとは、他の肥料とのフレンドや輸送工程などで支障をきたさないかどうか、肥料工場での使い勝手に拠る「実際のところ、現在

また、中国、インドに格による供給を目指している。

赤穂工場で試験製造

おける食肉の消費量増加に伴い、家畜飼料用穀物とその栽培肥料に対する投機的な先読みが働き、価格上昇に拍車をかけた。

しかし、ほどなくして、世界的に経済が不況に陥ると、一大消費国である中国をはじめ、商社など

環境への取り組み

は、自家発電による電力を利用し、にがりの冷却には海水を用いるため、二酸化炭素排出量に関して大きな負担にはならないという。「ただし、自家発電には化石燃料が必要なために、いかに効率を上げるかに尽きます」